

付論 1

松河戸様式の設定

1 はじめに

近年の濃尾平野における古墳時代土器編年研究の進展とともに、3世紀～5世紀の一括資料の提示が盛んに行なわれてきた。そのような中で1990年廻間遺跡の報告書の中で「廻間様式」を提唱し、3・4世紀のおおよその土器編年を行なってきた^{▼1}。そこでここでは廻間式土器の後続様式である「松河戸様式」を新たに設定することにしたい。

松河戸式
の提唱

松河戸式の提唱は1989年1月に大阪府豊中市で行なわれた第25回埋蔵文化財研究集会での発表要旨にはじまる^{▼2}。そこでの内容は塔之越遺跡SX01の次に西北出遺跡溝B・松河戸遺跡SK201・小田井遺跡SK01・宇田遺跡VI・VII層・勝川遺跡SX01という変遷を提示し、西北出遺跡から小田井遺跡までを「松河戸式」とし、それ以降を「宇田式」と仮称したいというものであった。なお当時まだ「廻間Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式」は設定できていない。その後若干の進展が認められたものの、基本的な変遷への批判と研究の深化はほとんど見られない。ただ加納俊介は「西北出期」と「松河戸期」との間に大きな画期を想定した。それは基本的には小型精製土器の崩壊に基づく原則論であった^{▼3}。

上条
荒新切期

ところで1968年に提示された大参義一編年では^{▼4}、「元屋敷期」の後を「石塚期」「上条期」「荒新切期」とされていたが、提示された資料そのものが考古学的に不安定なものであるという制約によって、時期の逆転・混乱が伴ない資料批判が困難である。しかしながら今日の愛知県内では「上条・荒新切期=5世紀の土器」という一般的な評価を受けているように見受けられる。

こうした点を踏まえながらここでは松河戸式を改めて設定しておきたい。しかし廻間様式や山中様式で行なったような詳細な分類案の提示に至っていない。それは以下のような資料的な制約が大きく横たわるからである。まず第1に松河戸遺跡での資料の在り方が極めて偏在的であり、さらに当遺跡は濃尾平野低地帯に所属していない。第2に全国的に布留中段階以降の編年研究が深化しておらず、形式の対比・抽出が困難である。さらに一括資料とされる基準資料が極めて少ない。こうした状況の中でここでは「松河戸式」の大枠の設定に主眼を置くことになる。

▼1 赤塚次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

▼2 赤塚次郎1989「東海」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会
赤塚次郎1991「古墳時代の時期区分と集落の動向」第91回愛知考古学談話会例会発表要旨

▼3 加納俊介1991「東海」『古墳時代の研究 6』雄山閣

▼4 大参義一1968「弥生時代から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』XLVII

2 分類

器種分類の困難さはそのまま変遷・系統のあいまいさになってしまうのであるが、とりあえず現状での分類を行なっておきたい。大きく甕を4類、高杯を4類、小型丸底土器を4類、壺を5類に区分し、その他として特に鉢とX型器台を加えることができる。

甕は口縁部の形状を重視してA・B・C・Dとする。

甕

甕AはS字甕で、さらにA1・A2・A3と細分する。A1はS字甕C類としたものを一括する。A2は口縁端部が肥厚し、体部のヨコハケが欠損するS字甕D類で、A3は山陰系の口縁部をもつS字甕。甕Bは宇田型台付甕(以下宇田型甕)。次に台付甕か丸底甕かが判定できない資料が多いため、甕Cはく字口縁甕を総括する。同様に口縁部に僅かな段あるいは鈍い稜を有する有段(稜)口縁甕を甕Dとする。

高杯はA・B・C・Dに分類し、屈折脚高杯Bの変遷をその機軸にする。

高杯

高杯Aは有段高杯で、脚部は大きく緩やかな外反脚で、透孔を伴うもの。調整技法にタテミガキを多用する。その形状によってA1・A2^{▼1}に細分する。高杯Bは原則的に透孔を伴うことがなく、脚部に屈折部をもつ系統に属するものを一括する。その形状によって細分し、B1は極めて細長い脚部をもち、B2は屈折脚高杯の典型的なもので、B3は杯部が浅く大きいもの。B4は杯部に明確な垂下稜を伴うもので、B5は脚部が緩やかに広がり、やや深い杯部をもつもの。高杯Cは大型の高杯で、杯部が深く脚部は大きく八字状に広がるもの。高杯Dは碗型の杯部をもつもので基本的には後続様式(宇田式)に含まれるものの。

小型丸底系土器^{▼2}(以下小型壺)は多く散見でき、松河戸式を特徴づけるものであり、ここでは廻間Ⅲ式後半期に盛行した小型丸底土器の系統に属すると思われる一群の小型壺を抽出する。その形状によってA・B・C・Dに細分する。小型壺Aはいわゆる小型丸底土器の範疇におさまるものであるが、ここでは口径が体部径を大きく凌駕し、かつ体部が著しく小さいものを一括する。小型壺Bは口径と体部径が類似するもので、口頸部は比較的小さく直口する。小型壺Bはさらに3つに分ける。B1は口頸部が体部とほぼ同じで比較的大きいもの。B2は口頸部が逆に明確に小さいもの。B3は頸部付近に明瞭な鈍い稜をもつもの。小型壺Cは口頸部が大きく有段部をもつもので、山陰系と考えられる。小型壺Dは有段口縁をもつもので、須恵器の影響が窺えるもの。

小型壺

▼1 A2は本来高杯A1とは系統を異にするものと考えられる。しかしながらその変遷・淵源地について明確な答えを持ち合わせていないためにここでは分類を保留する。

▼2 小型丸底土器あるいは小型丸底鉢・壺と総称される一群の土器を総括する。本来は複数の系列が存在するようである。

壺

壺は大きくA・B・C・D・Eに区分し、壺Aは広口壺、壺Bは柳ヶ坪型壺、壺Cは短頸壺。壺Dは口縁部に段ないし鈍い稜をもつものを一括し、有段口縁あるいは口縁上段部が大きく外傾するものや、複合口縁状を呈するもの等が見られるが、山陰系の影響が強いものと考えられる。壺Eは中型の直口壺で、E1は比較的短頸の外反口頸部をもつもので、E2は直口する比較的長い口頸部を有するもの。

その他、鉢は有段口縁鉢（3）の系統に属するものがわずかに初段階に残存し、その後松河戸Ⅱ式期（後述）に改めて直口鉢（83）が登場するものと考えることができる。それは韓式系あるいはその影響の中で解釈できるものであろう。

3 松河戸様式の細分基準

以上の器種の変遷を機軸として以下において様式細分を行なうのであるが、前述したように特定遺跡の遺構の重複関係が極めて少ないために、変遷の基本をS字甕D類と高杯Bの型式組列によるところが大きい。

S字甕
D類

S字甕D類は古・中・新段階とした基本的な変化を濃尾平野の中で想定している^{▼1}。S字甕D類古段階はS字甕C類から変化し、口縁部端部のみが肥厚し明瞭な面をもつ。さらに体部上半のヨコハケが欠損する段階。次の中段階の資料は器壁が厚くなり、口縁部も端部の厚さに合わせて厚く均一化する。また形態は体部最大径を中位に置くもので最も長胴化するもの。新段階の資料は口縁部の特徴的な屈曲が極めて鈍くなり、全体の器壁の厚さが急速に厚くなる。宇田型甕1類と共伴することが多い。体部最大径の位置が再び上昇傾向になる。

高杯B

高杯Bは無透孔屈折脚高杯で、これまでいわゆる「畿内系高杯」と無批判に総括されたものである。高杯B2に限定して今その基本的な変化を単純化すれば、杯部の稜径の増大化が基調に存在するようである。つまり徐々に杯部稜径が大きくなり、杯部の形態が深く高い杯部から浅く大きく外傾したものへ変化していることが分かる。

こうした特徴的な器種の変化を機軸にして濃尾平野の異なる遺跡間の資料を利用してその変遷を見通してみたい。しかしその前に松河戸様式を構成する基本的な形式群とその大区分を提示しておく必要がある。

▼1 赤塚次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

松河戸式は以下の基本的な形式をもって構成する。すなわち甕A2（S字甕D類）・高杯B（無透孔屈折脚高杯）・小型壺B（粗製小型丸底系土器）・壺C（短頸壺）及び壺D（有段口縁壺）である。さらに技法の特徴をまとめれば調整技法が欠落し、整形手法が表面化する。たとえばケズリ整形技法^{▼1}とした板状工具によるヨコ・ナナメ方向の掻き削るものが壺・甕に散見できる。ハケメ・ミガキといった基本調整手法は特定形式を除いて客体。指による器壁表面の整形がそのまま表面化するものが多い。全体的に粗製・粗悪化が基調となる。

整形手法
の表面化

こうした特徴を機軸に松河戸式を大きくI式とII式に2分して考える。松河戸I式期はS字甕D類の時代であり、高杯B2を基本に変遷する。松河戸II式期は宇田型甕が登場し、やがて主要な形式として位置づけられるようになる。韓式系・山陰系を中心とした影響が随所に認められる。

4 松河戸I式

前半期（1・2段階）と後半期（3・4段階）に区分でき、少なくとも4段階の変遷が想定できよう。

前半期

月縄手遺跡上層資料を基準資料と考える^{▼2}。さらに月縄手遺跡SX03の在り方からSX03下層と上層資料をそれぞれ時間的な変遷を内包した松河戸I式1・2段階とする。さらに月縄手遺跡SX01・SX02資料をこれを補完する重要な資料と考える。なおその他に1段階として堀之内花ノ木遺跡SD200上層（SK161）^{▼3}、西北出遺跡溝B^{▼4}さらに2段階として八龍遺跡A地区2号住居^{▼5}を加えることができる。

I式
1段階

1段階には甕A1（S字甕C類新段階）が残存し、甕A2（S字甕D類）古段階が登場する。月縄手遺跡SX02下層の資料がS字甕D類の最も初源的な形態と思われる。高杯は廻間III式後半期からの残存形式である高杯A1が見られるが、著しくその形態を小型化して存続する。これに高杯A2及びB1・B2が新たに加わり、特に無透孔屈折脚高杯Bの存在が印

▼1 器壁外面を整える手法のうちで調整技法ではなく、その前段階での整形技法に基づくもの。ケズリ手法においては乾燥後に改めておこなう手順をもつものが通常のケズリ手法とすると、半乾燥段階で器壁をナデるように工具を動かし器壁を直接整える目的のもの。

▼2 樋上 昇他1993『月縄手遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集

▼3 蟹江吉弘他1993『堀之内花ノ木遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

▼4 服部信博1990「岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物」『年報 平成元年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

▼5 杉山美雪1991『八龍遺跡A地区発掘調査報告書 各務原市教育委員会』

象的である。さらに廻間Ⅲ式後半期での高杯の激減とは対照的に、この段階で高杯の比率が相対的に急増する。なお高杯は全て外面タテミガキ調整を基本にし、脚部柱状内面は指頭ナデで整え、明らかな調整を施さないという特色が認められる。杯部は深く脚部屈折部内面も高さを保つ。高杯A 2は透孔をもち脚部端部を肥厚させる特徴がある。

小型壺はAとした小型丸底土器が残存するが、粗製化が著しく外面のミガキ調整はほとんど痕跡的。鉢さらに器台も粗製化を伴ない僅かに残存する程度となる。壺ではやはり壺A（広口壺）や壺B（柳ヶ坪型壺）が散見できるが、その他に短頸壺Cが新たに見られるようになる。器壁にはケズリ技法が表面化している。

I式 2段階

2段階になると甕A 1（S字甕C類）がほとんど認められなくなり、甕A 3とした山陰系口縁を有するS字甕は口縁の段部が大きく、さらに屈曲が鈍くなり最終段階を迎える。同時に器台・鉢類さらに柳ヶ坪型壺・広口壺もこの段階をもって消失したものと考えられる。高杯では高杯B 2類が主体的な存在となり、早くも外面タテミガキ調整が形態化して痕跡的となる。脚柱部に顕著な膨らみが見られるものも存在する。小型壺ではA類に代わって小型壺B類が主体を占める。小型壺B類はおそらく1段階をもって新たに登場する形態と考えられるが、特にB 2類とした口頸部の低い形態がこの時期以降明らかに主体を占め、体部に張りが見られる。なお外面は指で整えるのみ。松河戸I式前半期は廻間Ⅲ式からの残存形式が急速にその姿を消し、松河戸式の基本的な型式群が定着する時期といえよう。

後半期

松河戸遺跡SK201を基準資料とするが、前述したように松河戸遺跡が濃尾平野低地部からはずれておりその内容は再検討の余地がある。さらにここでは月縄手遺跡SX03最上層資料から高蔵遺跡SH01・松河戸遺跡SK201までの変化を全て含んだ段階を想定している。本来複数の段階を包含しているものと考えるが、便宜的に高蔵遺跡SH01^{▼1}・松河戸遺跡SK201を松河戸I式3・4段階の資料にあて、平野部での資料の増加により再考したい。

I式 3・4段階

松河戸I式後半期の特徴はまず甕A 2（S字甕D類）が中段階へと変化し、他の甕類やさらに壺を含めてその多くが最も長胴化する段階である点である。さらに外面はケズリ技法が盛行し、ハケメがほとんど認められない。高杯は外面調整が欠落した高杯B 2が盛行する。また大きく浅い杯部をもつ高杯B 3が見られるようになる。小型壺はB 2類が多く、体部は最も球形に近くなる段階である。壺Dとした有段口縁壺が定量見られ、さらに有段口縁をもつ甕Dも明らかに前半期に比べて多く散見できるようになる。3段階では高杯B 2の脚部内面にケズリが見られる資料が一部にあり、4段階へとつながる。なおこの形式では4段階の高杯杯部が最も浅くなるようである。小型壺はB 1が3段階に見られるものの、4段階ではB 2が主体を占める。

▼1 重松和男他1987『高蔵遺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XX

5 松河戸II式

現状では愛知県稲沢市福田遺跡出土遺物をもって考えることができる^{▼¹}。特に福田遺跡SB04は松河戸II式2段階の標識資料とすることができ、同じく福田遺跡SD01もほぼ同様な時期が中心と思われる。また松河戸遺跡SK07もこれに含めて考えることができよう。さらに重要な資料として、三重県亀山市地藏僧遺跡がある^{▼²}。地藏僧遺跡SB22及びSB44・45の一括資料は、この時期における特定遺跡での変遷を窺える良好な資料と考えられる。つまりそれぞれ松河戸II式期1段階・2段階の変化に対応し、福田遺跡SB04の一括資料と地藏僧遺跡SB44・45は同時期の資料と推定できる。ここでは地藏僧遺跡の在り方を参考に福田遺跡を中心として松河戸II式期の問題点を整理しておきたい。

福田遺跡
SB04

松河戸II式期になると高杯B4・B5さらに高杯Cの参入によって高杯全体として型式が多様になる。2段階では高杯B2は著しくその脚部の形態が肥満化し、末期的な状況となり、変わってB5とした緩やかな外反する脚部が徐々に目立つようになる。さらに小型壺は大きく変化し、相対的な量を増加させるとともにさらに新たに小型壺C・Dとした山陰系・韓式系の影響が強い形態が随所に見られる。そして口縁部に鈍い稜が見られるB3とした特徴的な形態が出現して小型壺の主体を占める。なお2段階では体部の形態が偏平化するようである。さらに外面体部下半をヨコケズリするものが主体となる。また鉢C・Dとした鉢類がこの段階で再び登場する。これらの形態はおそらく韓式系の影響に基づくものと考えられる。

小型壺
B3

さて次に最も重要であり特徴的な変化をまとめておきたい。すなわち松河戸II式期において宇田型甕が登場し、S字甕D類新段階と共伴する点である。地藏僧遺跡SB22ではS字甕D類新段階の中に宇田型甕1類が伴うが、逆にSB44・45では宇田型甕が主体を占め、S字甕D類は極少量となる。これは1段階と2段階の変化を端的に表わしているものと考えられ、福田遺跡SB04ではやはり宇田型甕1類が主体的な位置を占める。

宇田型甕

さてこのように松河戸II式期は2段階の変遷が辿れるようではあるが、さらに次の後続様式(宇田式)との間には若干の開きがあるようにも思われ、さらにこの間を埋める資料が推測される。今後の良好な資料の追加を待ちたい。

▼¹ 日野幸治1989『土田関連遺跡発掘調査報告書』土田関連遺跡発掘調査団

▼² 『地藏僧遺跡発掘調査報告』1978亀山市埋蔵文化財調査報告I

6 松河戸様式の問題点

■廻間Ⅲ式との関係について

廻間様式と松河戸様式との関係をここでまとめておきたい。まず様式を構成する土器型式について見ておくと、廻間Ⅲ式ではS字甕C類が存在し、高杯は廻間Ⅱ式後半期において確立した外反脚を有する有段高杯を踏襲しており、器台・鉢を含め小型精製品ならびにその系譜をもつ器種が盛行している。ところが、松河戸Ⅰ式になるとこうした基本的な型式群が大きく崩れ、器種そのものが変わってしまう点が重要である。たしかにS字甕においてはC類から段階的な組列が認められS字甕D類へと変化する。がしかし他の器種においてはその多くが消失ないし激減し、替わって屈折脚高杯に代表されるまったく新たな形式が参入する。と同時に高杯の量的な比率も一気に増大する。さらに壺や小型壺にもあらたな形式（壺D・小型壺B）が存在するようになる。加えてS字甕D類に象徴されるように器壁の厚化、調整技法の著しい省略化が全体の器種にも見られ、松河戸式土器から醸しだされるカタチのイメージは、残念ながら粗雑化という悪評はまぬがれない。

粗雑化

さて廻間Ⅲ式後半期の標識資料としている岩倉城下層資料^{▼1}と松河戸Ⅰ式前半期との様相の違いは上記のとおりであるが、廻間Ⅲ式4段階と松河戸Ⅰ式1段階の問題をさらにまとめておく必要がある。

廻間Ⅲ式4段階の資料は岩倉城下層SK1204や・宮之脇遺跡第2号住居^{▼2}が代表的なものであり、若葉通遺跡SB02^{▼3}がその内でも最も新しい様相を残す資料と考えられる。これらの土器群にはあきらかに有段高杯の存在が極めて少ない点が共通して窺い知れる。一方で松河戸Ⅰ式1段階の月縄手上層SX01あるいはSX02・3下層資料は有段高杯を残しつつ新たな屈折脚高杯が多く散見できるのであり、この点を踏まえてもそこに大きな画期が存在していることは容易に推察できよう。

■松河戸式の淵源と畿内との併行関係について

松河戸式土器に見られる新たな型式群の淵源についてであるが、従来はどちらかという屈折脚高杯を代表させて無批判に「畿内系」と一括されてきたようでもある。さらにこうした相似形態が列島的に拡散することから一律に畿内政権との関係を想定する傾向が強い。しかし詳細な形態の比較や技法の検討からは、こうした結論への早急な帰結には躊躇

▼1 服部信博他1992『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集

▼2 宮腰健司1988「宮之脇遺跡第2号住居出土土器について」『古代』86号

▼3 伊藤厚史1989『若葉通遺跡』名古屋市教育委員会

せざるをえないようである。例えば屈折脚高杯の外側タテミガキ調整は畿内にはほとんど見られないし^{▼1}、A2及びB1の形態は明らかに畿内とは異なる系譜と考えざるをえないようである。さらに壺Cや壺Dも同様であり、また小型壺Bは畿内においても突然の出現と理解できるものである。相対的に畿内あるいは東海地域への影響を与えた第3の地域を摸索する必要がある▼2。

次に畿内との併行関係であるが、現状では松河戸I式期での共伴関係資料はほとんど見出だしえない。しかし松河戸II式期において若干の資料が存在する。もっとも良好な資料と考えられるものは山田道第2次SD2570上層出土資料である▼3。共伴する台付甕は宇田型甕1類のものである。SD2570上層資料は韓式系土器を含むものであり、その編年的な位置づけが大変重要な資料と考えられる。高杯・小型壺等の形態から上ノ井手遺跡井戸下層資料▼4よりは新しいものと思われ、八尾南遺跡SE21▼5と近いものと考えられる。松河戸II式期は韓式系土器あるいは初源的な須恵器との共伴が想定されるこうした段階と理解できよう。また一方で廻間III式後半期のS字甕C類が平城宮下層SD6030▼6で共伴関係が認められるところから、松河戸I式期はその間の時期に位置するものと見て大過なからう。因みに藤原宮内裏東外郭下層SD912にはタテミガキを施し圧縮した形態の高杯脚部が存在する。こうした布留式土器の中で盛行する特徴的なヨコミガキ調整が欠落し始めるこの段階が、おおよそ松河戸I式前半期と基本的に併行するものと考えたい。

山田道2次
SD2570

■後続様式（仮称宇田式）について

松河戸II式期に後続する土器群がどのようなものであるかについては、現状において良好な資料に恵まれていないため、不明瞭と言わざるをえない。しかしおおよその予測は断片的な資料群によって推測できる。現状では一宮市浅井第3号墳石室前方▼7や一宮市同者遺跡▼8の資料が仮称「宇田様式」古相に相当するものと考えておきたい。なお浅井第3号墳石室前方資料は同者遺跡内に所属しており、宇田型甕の変化からも浅井第3号墳石室前方資料が最古相の資料と考えられる。その様相は以下のような土器群によって構成される

同者遺跡

▼1 ただしこれが布留式のヨコミガキが欠損した段階であり、そのタテ方向の面取り状の調整痕との類似点を指摘することも可能でもある。

▼2 現状では明確に指摘できない。ただし山陰系の土器が目立つ点は留意したい。

▼3 西口寿生1991「山田道第2・3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』21 奈良国立文化財研究所

▼4 木下正史・安達厚三「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻

▼5 『八尾南遺跡』1981八尾南遺跡調査会

▼6 奈良国立文化財研究所1981『平城宮発掘調査報告X』

▼7 岩野見司他『新編一宮市史』資料編3

▼8 土本典生他1991『同者遺跡発掘調査報告書』浅井古墳発掘調査会

ものであろう。すなわち宇田型甕（2類）^{▼1}・椀形高杯・僅かな口縁部をもつ特徴的な鉢、さらに口縁端部を摘み上げる長胴の丸底甕が主要な型式として考えられる。これらの主要な型式は、特徴的な甕に代表されるように、韓式系の影響を受けているものと理解できるものであろう。なお共伴する須恵器は城山2号窯期を中心とするものであり、おおむねTK208型式に併行するものと考えられる。

▼1 赤塚次郎「最後の台付甕」『古代』86号 早稲田大学考古学会

この中で宇田型甕の1～4段階の変遷を考えたが、ここではそれを1～4類に改める。

編年表遺跡一覧

廻間Ⅲ式 4段階.....

岩倉城下層SK1204...1・2・3・6 若葉通遺跡SB02...5 塔の越遺跡SX02...7

松河戸Ⅰ式.....

月縄手遺跡SX01...8・9・11・13・15・20 SX02下層...10・14・21・22

1段階 SX03下層...12・17・23・24

朝日遺跡...18 西北出遺跡溝B...16

2段階 月縄手遺跡SX02上層...26・30・31・32・33・36 SX03上層...25・34・38

八龍遺跡2号住...19・27・28・29・35

3段階 月縄手遺跡SX03最上層...39・44・37

高蔵遺跡SH01...40・41・42・43・45・46・47・48・49・50・51・52 朝日遺跡...69

4段階 松河戸遺跡SK201...53・54・55・56・57・58・59・60・61・62・63・64・65・66・67・68・69

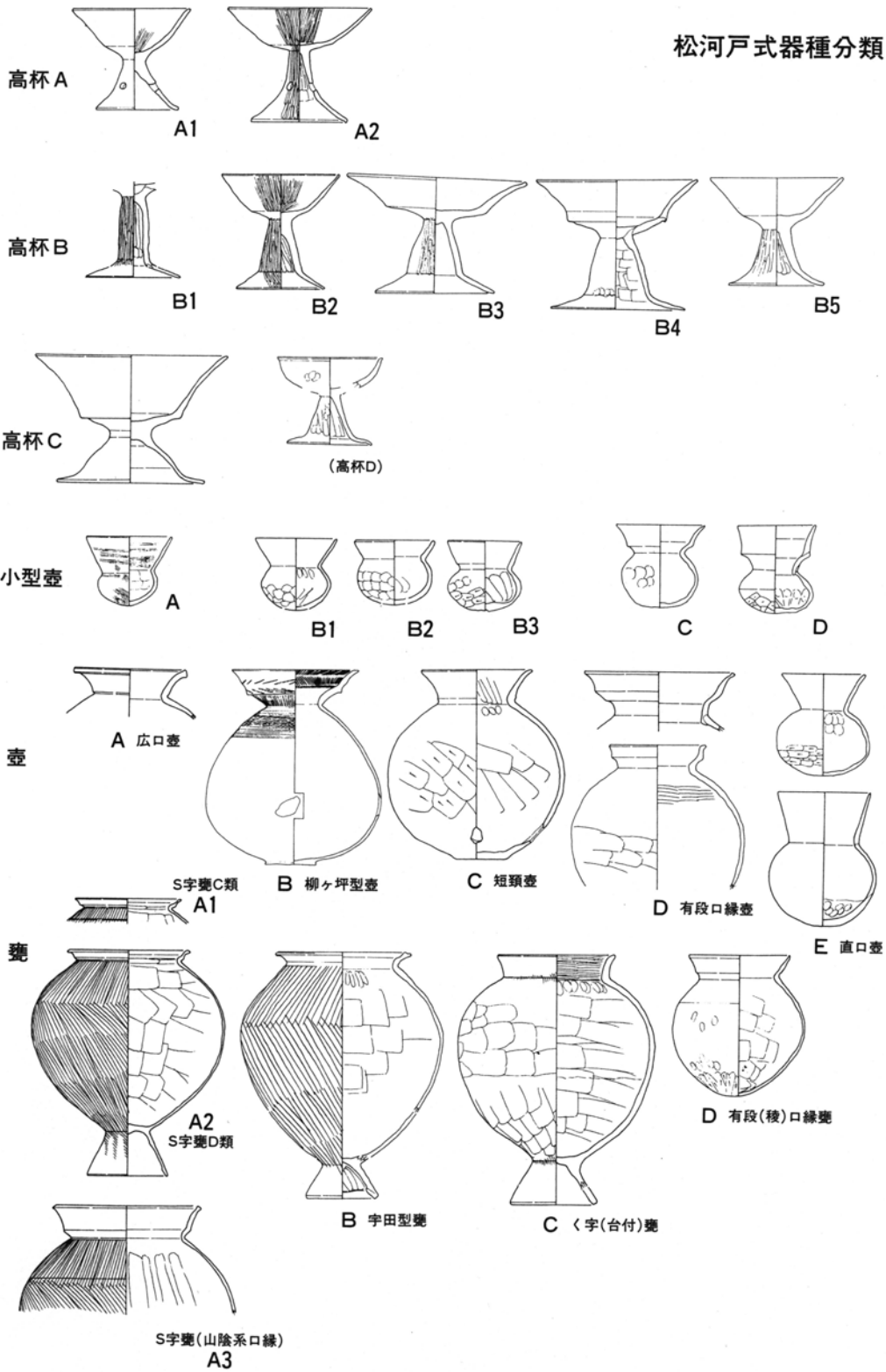
松河戸Ⅱ式.....

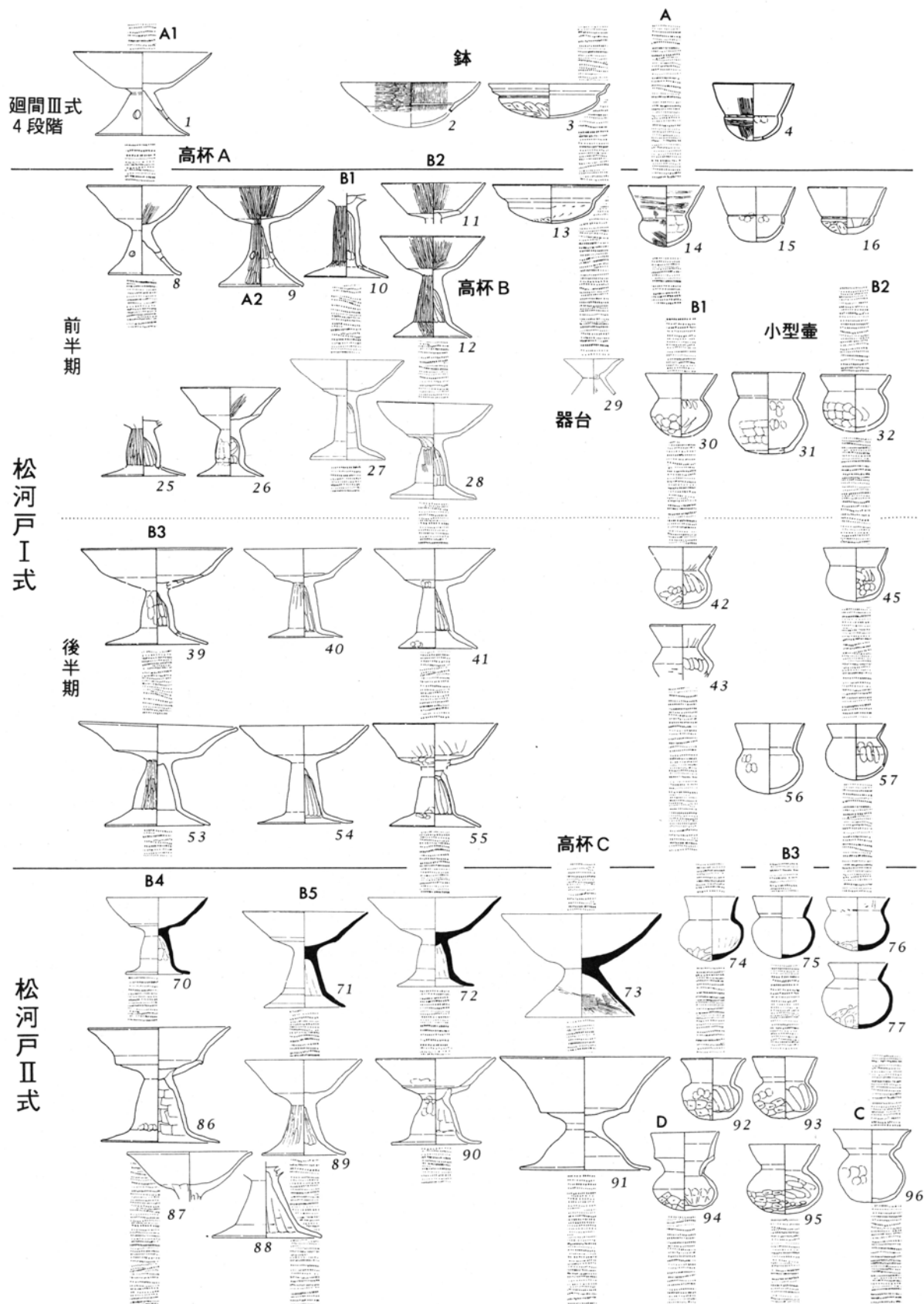
1段階 地藏僧遺跡SB22...70・71・72・73・74・75・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85

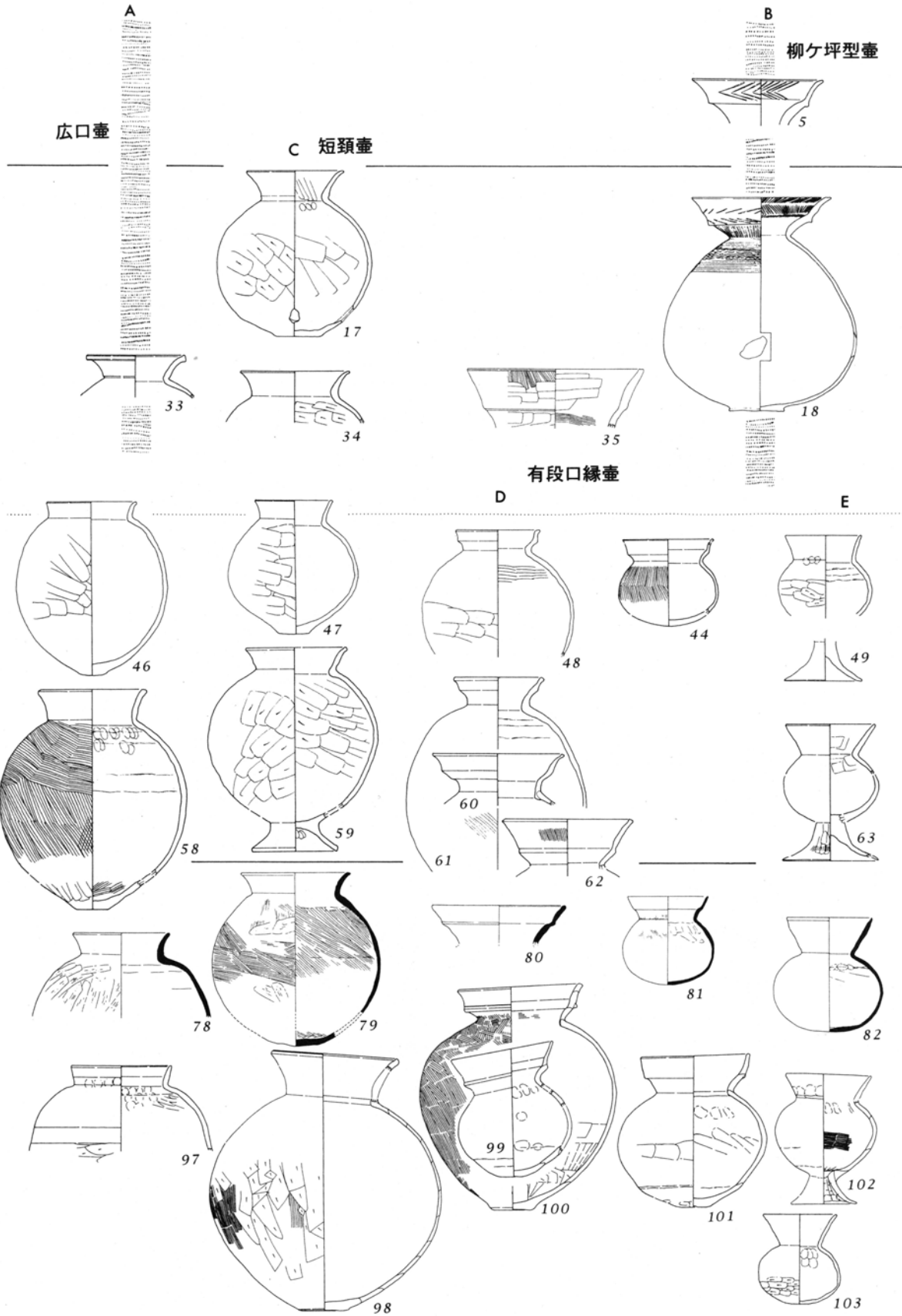
2段階 福田遺跡SB04...87・88・89・90・92・93・95・96・98・103・106・107・108・109

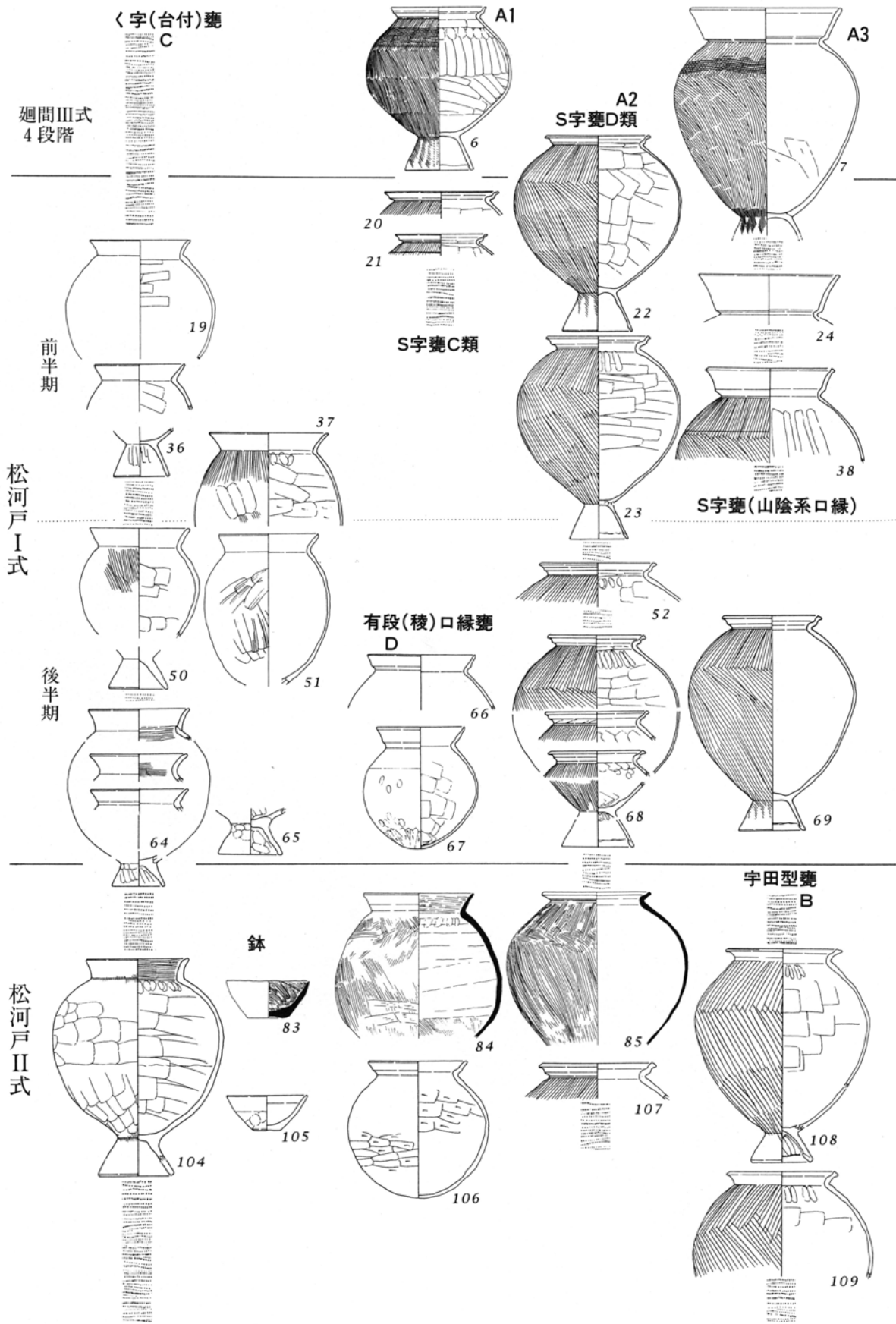
福田遺跡SD01...94・97・99・100・101・102・105 松河戸遺跡SK07...86・91・104

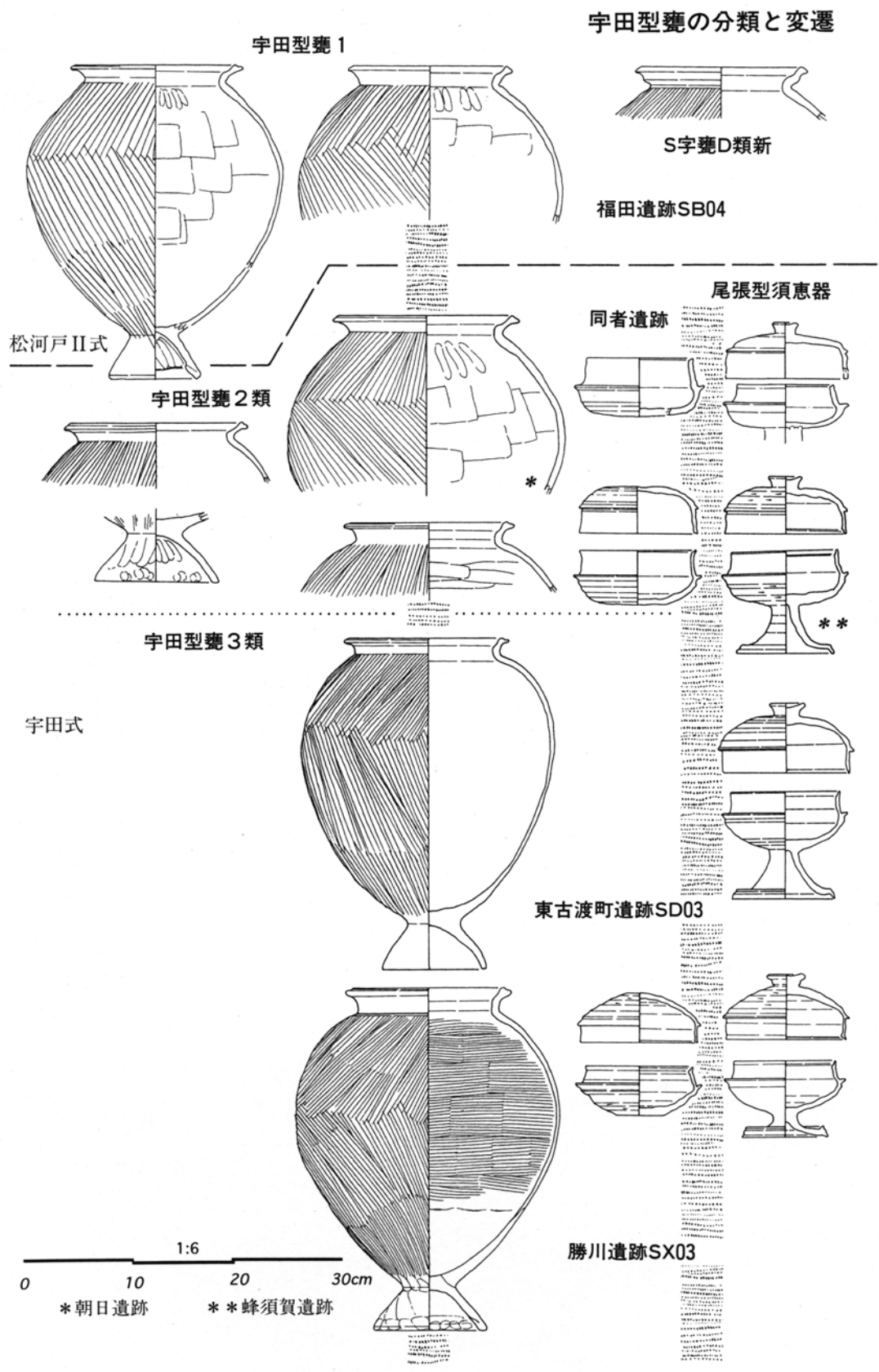
松河戸式器種分類

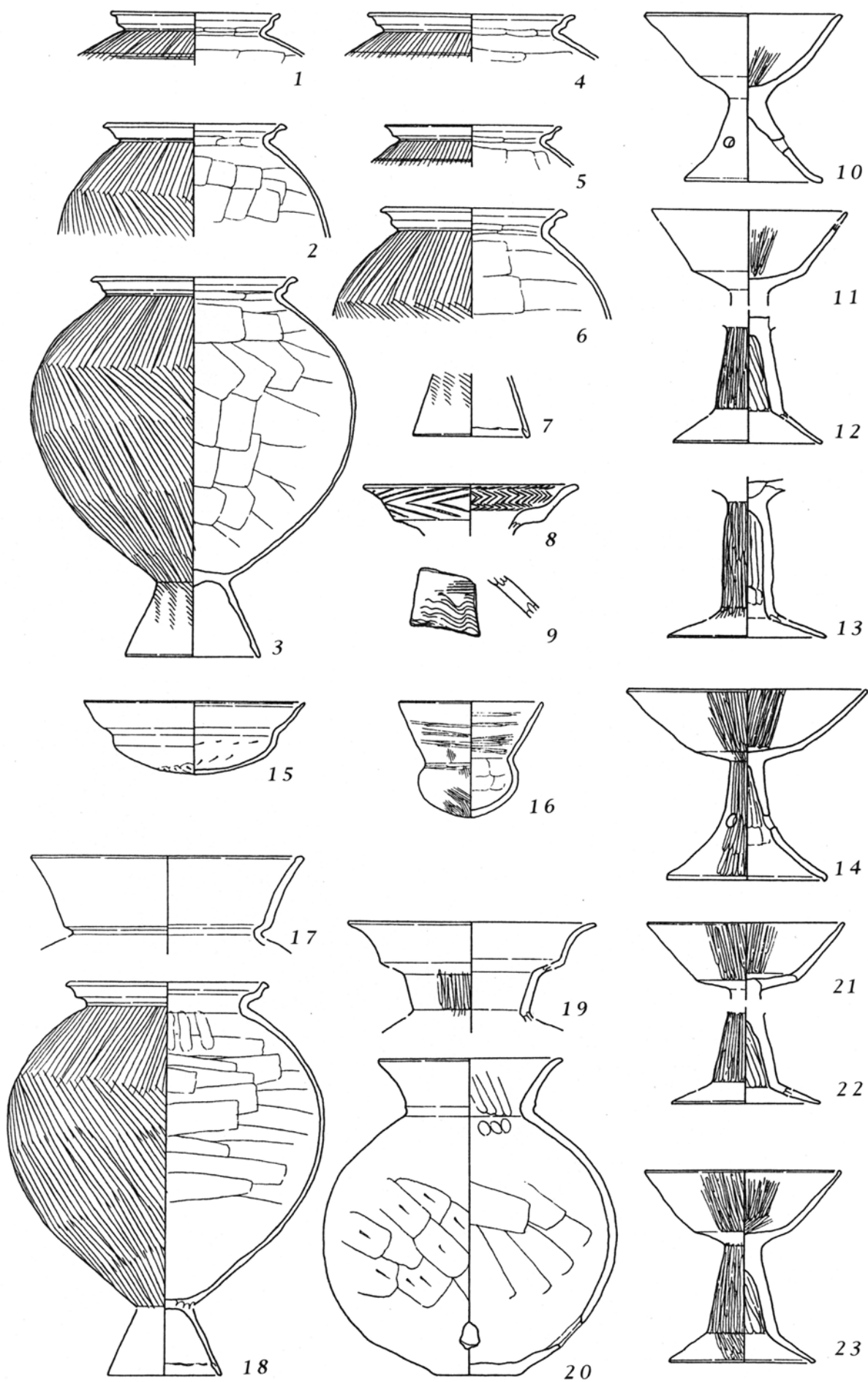




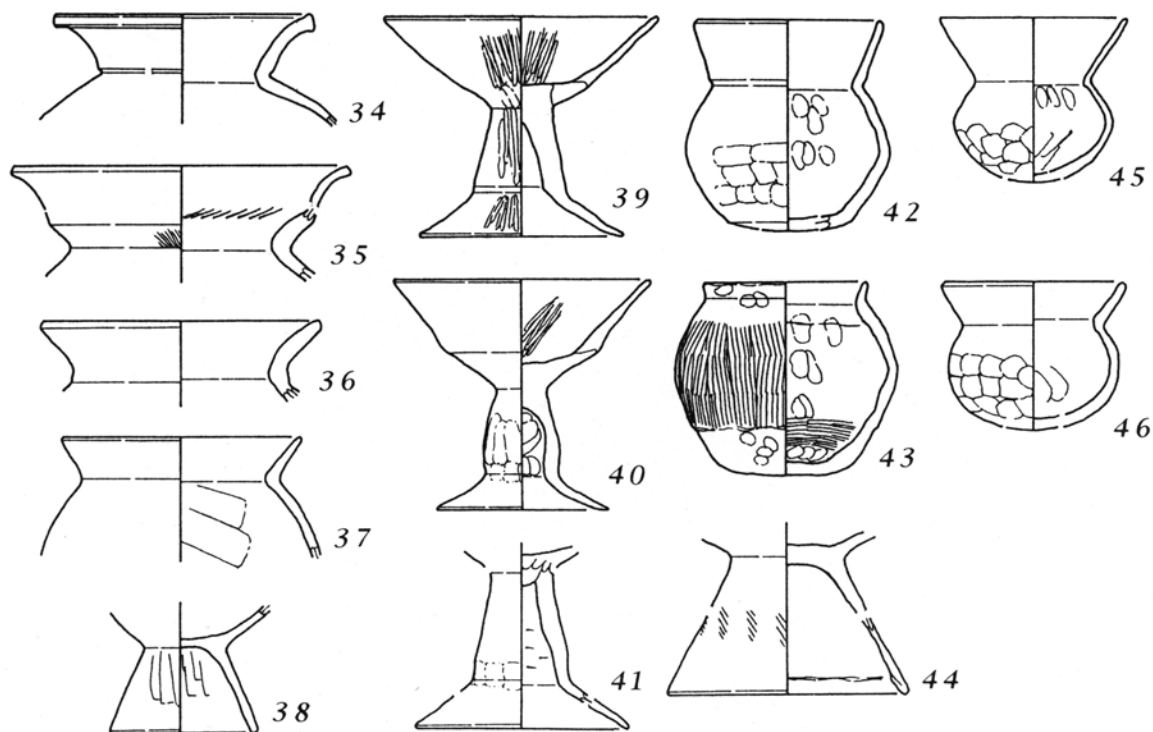
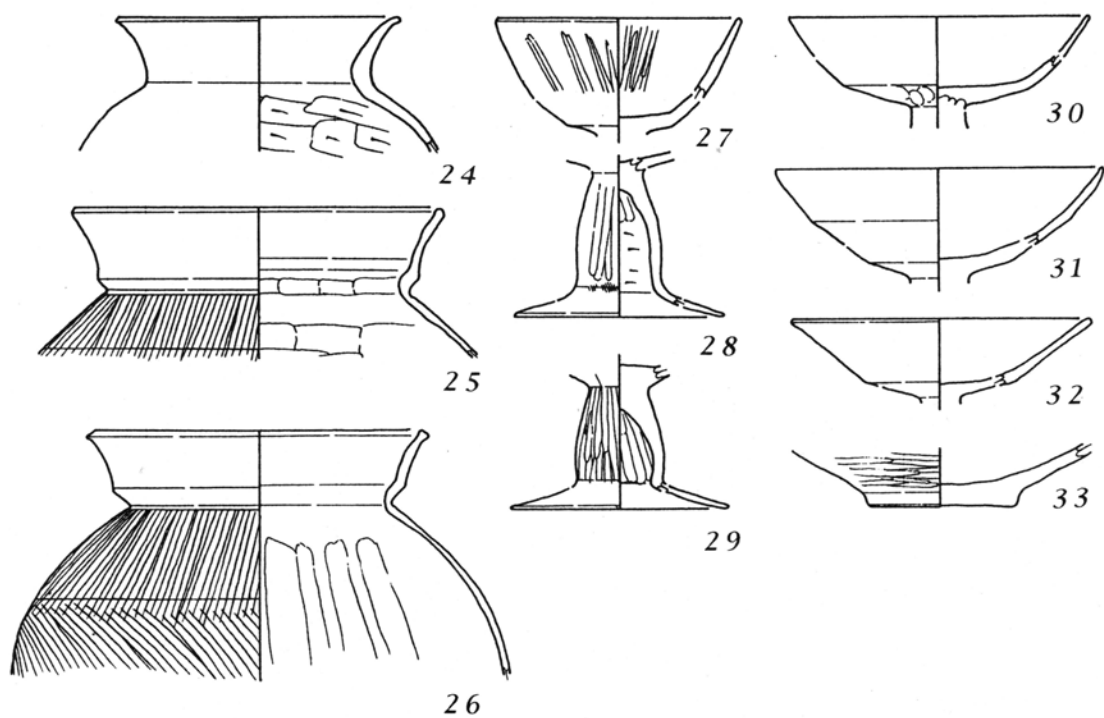






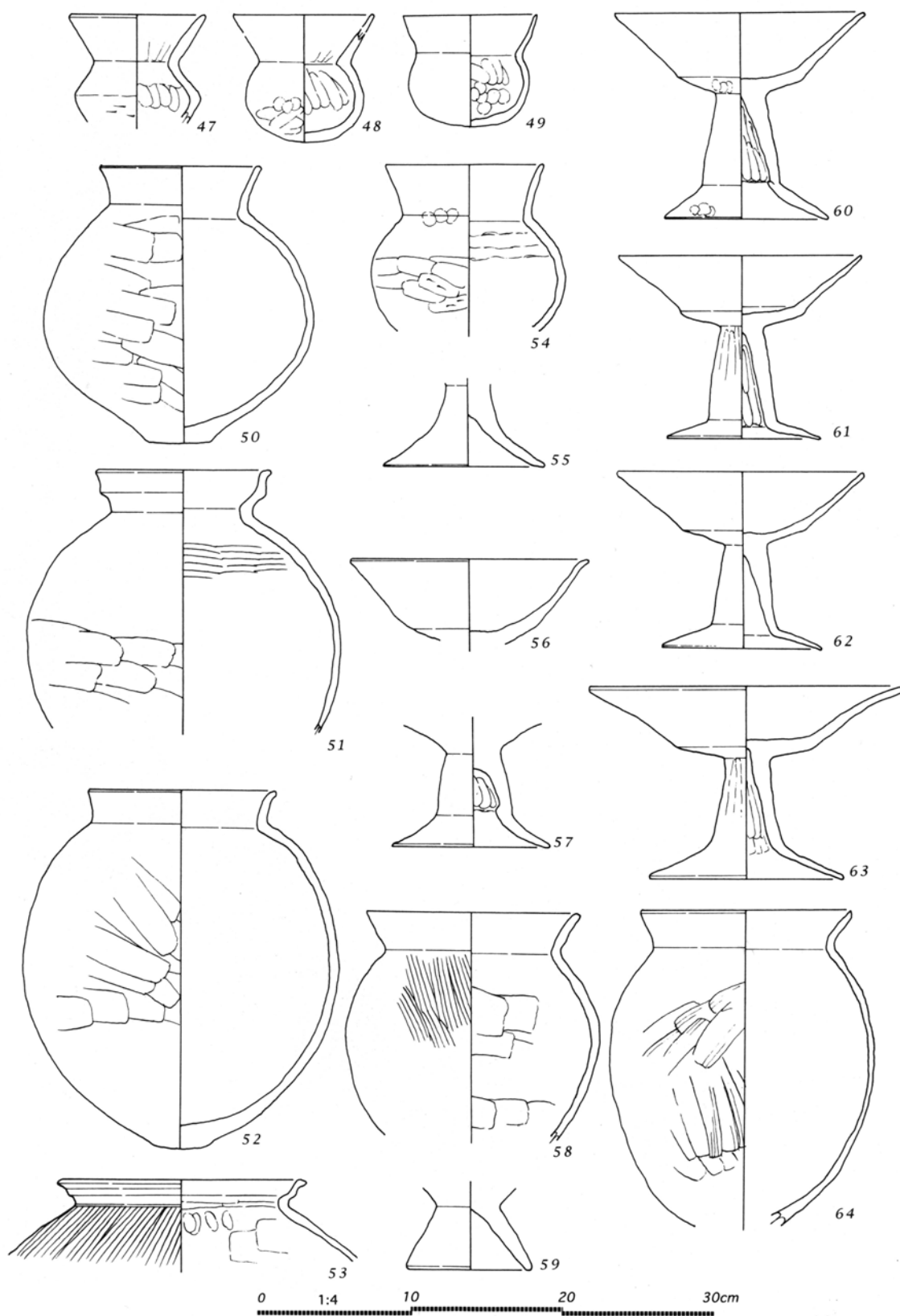


月繩手遺跡上層 1~9・11~13 : SX02下層 10・14~16 : SX01
17~23 : SX03下層

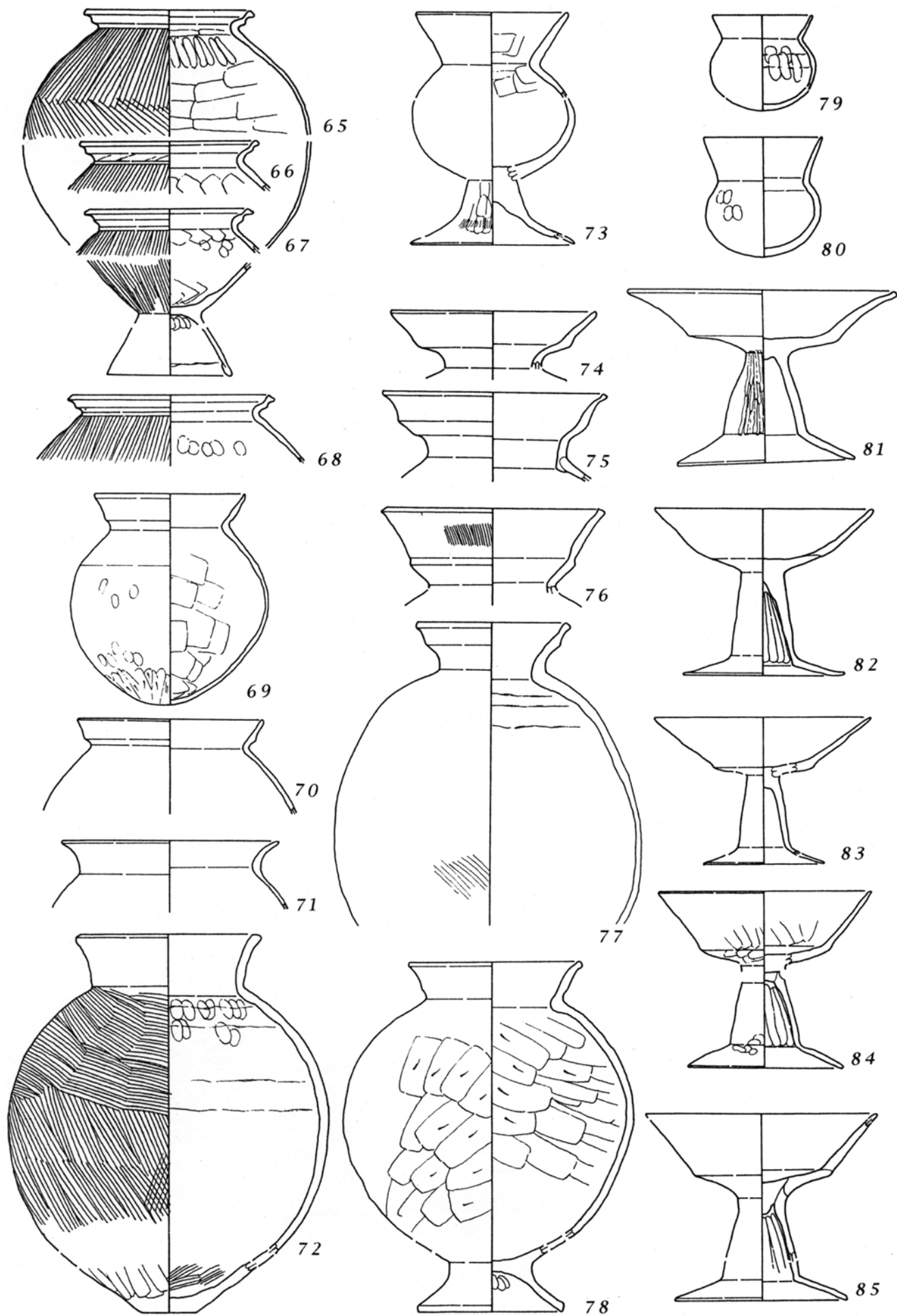


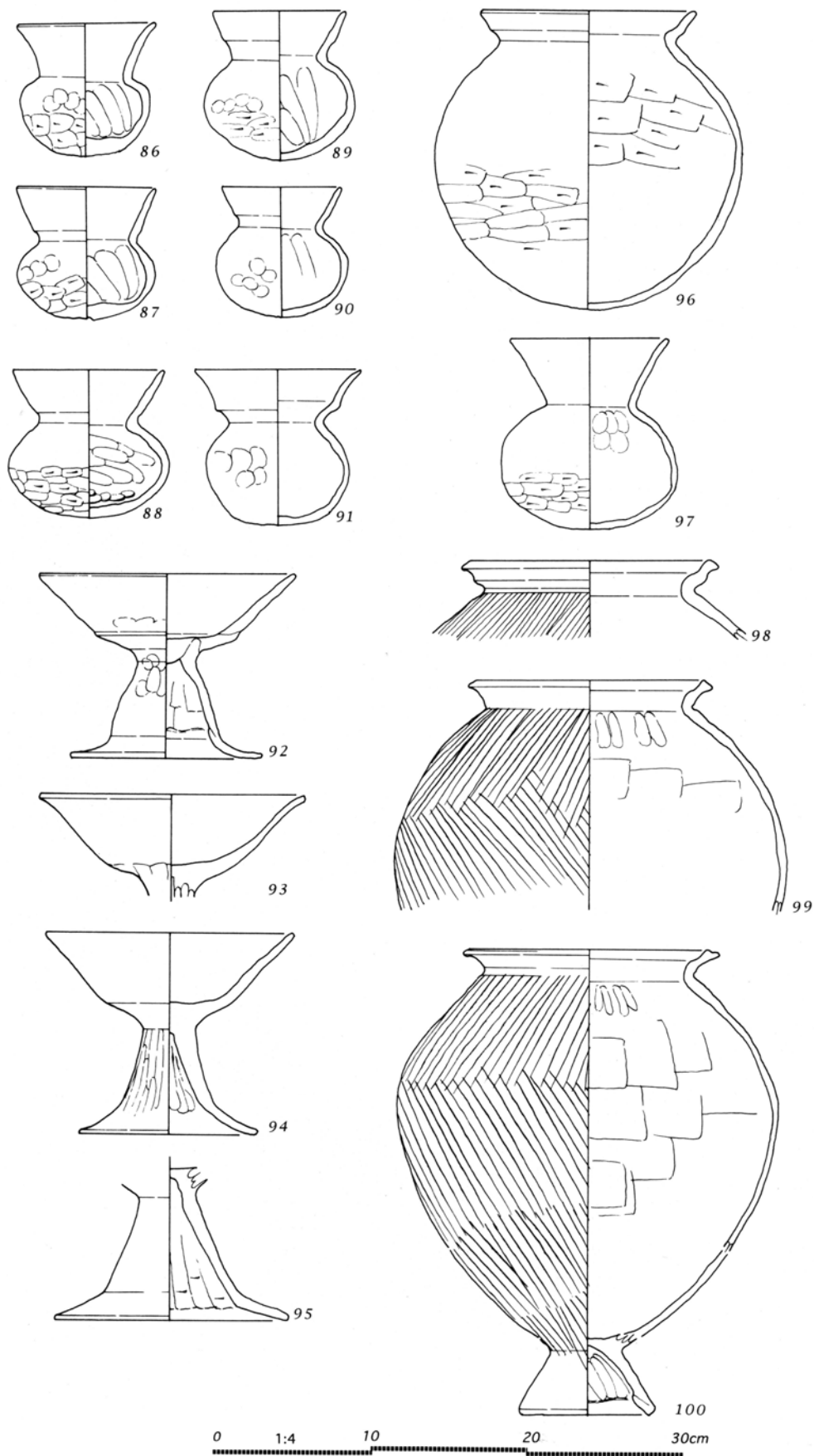
0 1:4 10 20 30cm

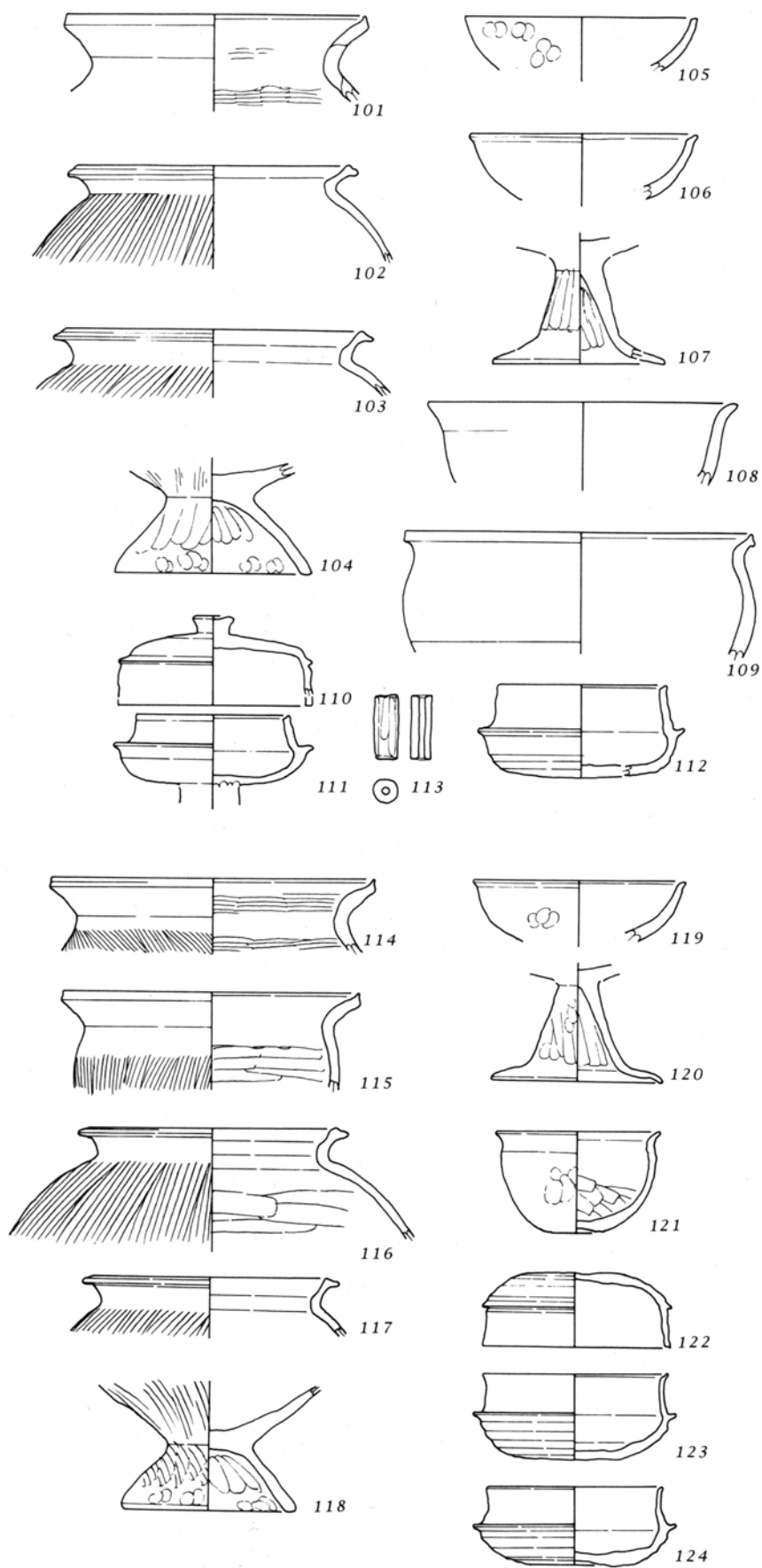
月繩手遺跡上層 24~33: SX03上層 34~46: SX02上層



高藏遺跡SH01







101~113：浅井古墳第3号墳石室前方(同者遺跡)
114~124：同者遺跡